

# 真実[しんじつ]の石の山

j1n

みんな このよに うまれる まえに かならず

神さまから しんじつの 石ころをあたえられます。

そして神さまは みんなにいいます。

「この石をもっていきなさい、そして、それをたいせつにしなさい。

きっと、きみのやくにたつときがくるのだから。

けっしてその石をすてたり、なくしたりしては、

だめですよ。わかったね。」

こうして、石をもらったにんげんたちは、

このよに生まれてくるのでした。

あるものは、くだものや のむすこ として生まれ、

あるものは、しちやのむすめとして生まれ、

それは、さまざまです。

時がたつうちに

あるものは、その石をもっていることすらわすれ、

あるものは、そのいしをほうせきのようにたいせつにして、

そしてまたあるものは、そのいしをみずからすてるのです。

「こんないしころもっていたってしょうがない。

こんな重くて、いまましいいしなどすててしまえ。」

すてられてしまったいしころは、なきながら、

そのいしをすてたもののあとを、とぼとぼうしろからついていきます。

そして、そのいしころは、心のなかでいうのです。

「きっとぼくのことをもういちど、ひろってくれるさ。

だから、いまはこれでいいのさ」

かわいそうなおいしさん。

本当にまた迎えにきてくれればいいね。

神様からもらった石ころを、

まるでほうせきのようにたいせつにしていたものは、

突然石ころが宝石にかわってしまうのを見ていうのです。

「なんてことだ」そのものは慌てて

その宝石にかわったいしころをふところにかくすのです。

ふところにかくしたほうせきは、かがやきをまして、

めもくらむばかりにかがやき、

その輝きの中から、かみさまがあらわれていうのでした。

「きみは、僕とのやくそくをおぼえているかい」

そのものは神様がなにをいっているのかわからないのですが、

このよにうまれでるまえにした、かみさまとのやくそくを

おもいだすのでした。

かみさまは、このいしころをわたすときいいました。

「そのいしころをたいせつにしなさい。

そうしていると、そのうちそのいしころは

だんだんおおきくなってから、

それがおおきくなりきったら、

ここにいちどかえってきなさい。」

こうして、石を大切にしていたものは、

かみさまにあうことができるのです。

かみさまは、そのものが、

やくそくのことをおもいだすのを

ニコニコしながらみまもりつづけ、

やがてすがたをけすのでした。



宝石に変わったいしころをたいせつにしまいつづけ、

おおきくなりきると、そのものはかみさまのくにの

大きな広い野原のうえにそのいしころを返しに

いかなければならないことにきづき、

そののはらにいくためのじゅんぴをはじめます。

そののはらにつくと、そのものは、

かみさまのくにのひろいのはらのうえに、

じぶんのおおきくなりきったほうせきをおくのです。

かみさまのやくそくをおもいだしたものが、

こののはらに、ひとり、また、ひとりと、

かえってくるうちに、

ほうせきにかわったいしころが、

ひとつ、またひとつとふえていきます。

その広いのはらのうえにおかれたほうせきたちは、  
形といい、大きさといい、いろといい、つやといい、  
どれもさまざまです。

つきひは、ながれて、その

のはらのうえにつまれたいしは、

とうとうおおきな、ほうせきのやまになりました。

しだいにいしのかさなりあう重みのために、

ひとつの大きなほうせきのやまになってしまいました。

神様からうまれるまえにもらったいしの名は、

ひとびとにさまざまなよばれかたをしていました。

あるものは、愛とよび、

あるものは、やさしさとよび、

そしてまたあるものは、にんげいとよび、

またあるものは、しづけさとよびました。



そして、その大きな石のやまをひとびとは

かみとよびました。

おしまい